

様式 1

令和 5 年度学校評価報告書
渋谷区立笹塚中学校

令和 5 年度 学校評価報告書

令和 6 年 2 月 1 4 日
渋谷区立笹塚中学校

(1) 新たな学びの実現

【ア】 自己評価

重点目標		①生徒の学ぶ意欲を醸成する。 ②ICT を効果的に活用した学び合いのある授業を推進する。 ③探究的な学びのある総合的な学習の時間（シブヤ未来科）を充実させる。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・アンケートにおいて「授業が分かりやすい」を 80 %以上とする。 ・家庭学習の習慣がない生徒の割合を 0 %とする。	・生徒が興味や関心をもって、主体的に学ぶことができるように働きかけ、特に国語、数学、英語については、学習者用デジタル教科書を活用した。 ・放課後の学び「スタディーズカフェ」として図書室を開放した。	B	都学力向上調査において、「授業が分かりやすい」と回答した生徒は各教科 80 %を超えていた。しかし、家庭学習を全くしていないと回答した生徒が 12 %いた。各教科において家庭学習へつなげる工夫を今後も検討する。	B
②	・アンケートにおいて「タブレット端末の効果的活用」について肯定的な回答を 80 %以上とする。 ・アンケートにおいて「協働的・対話的な学びの授業の実践」について肯定的な回答を 80 %以上とする。	・生徒がタブレット端末を自在に使いこなすことができるよう、授業中はもちろん、生徒会活動など様々な場面で活用できるよう、指導方法を工夫した。	B	アンケートにおいて「タブレット端末の活用」「協働的・対話的な学び」はいずれも 80 %を超える肯定的な回答を得ている。今後は、生徒個々の能力を伸ばしていく個別最適な学びを進めていく必要がある。	B
③	・アンケートにおいて、「シブヤ未来科の学習を推進している」について肯定的な回答を 80 %以上とする。	・「シブヤ未来科」において、多くの情報から何が必要で大切かを判断し、他者と協働しながら問題を解決し、新たな解決策や価値を生み出すことができるよう授業を展開した。	B	アンケートにおいて肯定的な回答が 60 %越にとどまった。「調べる」「体験する」「発信する」というプロセスのもと、協働的な学習を行い、自分事として未来を創造しようとする姿勢は少しずつみられた。今後も一層、探究的な学びを推進する。	C

A＝十分達成できた B＝おおむね達成できた C＝未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	生徒にとって分かりやすい授業は大切。笹塚中生徒の素直なところをさらに伸ばしてほしい。

学校の自己評価は、A＝適正である B＝おおむね適正である C＝適正ではない

(2) 安心・安全に挑戦できる環境

【ア】 自己評価

重点目標		①いじめ問題への意識を高くし、未然防止に努める。 ②すべての生徒が、安心して挑戦できる環境づくりを構築する。 ③自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動ができる。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・いじめ対応に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 80% 以上とする。 ・いじめのない安心して通学できる学校づくりを目指す。	・いじめ防止に関する授業を展開するとともに、些細な事案でも情報共有して、組織的に対応した。 ・いじめアンケート・生活アンケートを隔月実施し、聞き取りを行う。 ・心の天気の利用をし、いつでも相談できる教育相談体制を構築した。	B	アンケートでは肯定的な回答が 60% 超と、いじめ対応に関する周知や理解が不足していた。全教員が小さなトラブルにも丁寧に対応し、疑いの段階から組織的に対策を講じていく。	B
②	・アンケートにおいて「安心して学習に取り組める」の肯定的な回答を 90% 以上とする。 ・不登校の生徒の状況を把握するとともに、適切な支援を行う。	・月に 2 回校内委員会を開催し、個々の生徒の現状把握、対応方法について確認した。 ・担任や学年の教員が組織的に道徳科の授業に関わり、話し合いを通して、解決策や合意形成、納得解を得られる授業を展開した。	B	アンケートでは肯定的な回答が 80% 超であった。月 1 回から 2 回への校内委員会を開催し、クラウドを活用したことで、瞬時に情報を共有し、適切な対応ができた。今後は教科等の授業で、保護者や地域との連携の在り方について考え、具体化を図る。	B
③	・学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりを組織的かつ効果的に推進する。	・厳しさと優しさを兼ね備えた指導のもと、すべての教職員の意欲的な参画と生徒の主体的な学級活動を促進し、望ましい人間関係を形成した。	B	生徒会活動や地域行事等を通して、生徒自身が参画し、積極的に議論に参加することができた。今後も生徒が健全な学校生活を送り、よりよく成長できるような実践を促す。	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	アンケート回答率以上の成果があると認められる。地域・保護者が積極的に参画することが必要。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(3) 校務DX (働き方改革)

【ア】 自己評価

重点目標		①校務 ICT 化の推進による教職員の負担軽減 ②会議等の精選と意識改革 ③ペーパーレス化の推進			
評価指標		取組内容 (具体的に)	評価	成果	評価
①	アプリを活用した学校だよりの配信などを充実し、印刷業務等を軽減することで、生徒指導や教科準備などの時間を確保する。	学校や PTA からののお知らせは原則、Home&School を使って配信した。また、校内の連絡事項も Teams を活用したデータ配信を徹底した。	A	アンケートの集計は ICT を活用することで負担軽減につながった。また、アプリによる欠席連絡が定着し、勤務時間前の電話応対が軽減された。学校からの配信を確実に全員受信してらうための周知と協力を、継続的に行う。	A
②	・職員会議を実施しないため、運営委員会における報告を、全教職員が理解する。 ・TLD において、教員の学びの機会を確保する。	・参加していない会議については、教員が主体的に情報取得に努めることや学年の会議において周知することを徹底した。 ・新たな学びの推進や DX スクールとしての取組を実践した。	A	・会議を精選したり、時間内で会議をしたりすることで生まれた時間は、研修会や教材研究、生徒会活動等に活用された。 ・クラウドを活用した共同編集機能を活用し、自分の考えをより良いものへ変容させる対話的な学びの実践ができた。	B
③	・生徒、保護者のペーパーレスの意識を定着させ、アンケート結果の肯定的評価を 80%以上とする。	・学校だよりや保護者へのお知らせ等は Web サイトを活用して発信した。 ・議案書や発表原稿等の作成に ICT を活用し、タブレットを読み原稿とした。	B	「ペーパーレス化」に関するアンケート結果の肯定的評価は 90%超であった。ペーパーレス化により、配信された文書を読まないなど周知の難しさが課題である。	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	徹底したペーパーレス化が実践された。データ配信が定着するまでにもう少し時間はかかる。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(4) 家庭・地域との協働**【ア】 自己評価**

重点目標		①学校運営協議会との連携と協働 ②保護者との連携強化 ③社会に開かれた教育課程の実現			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・「学校運営協議会」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を 80%以上とする。	・学校運営協議会を年 5 回開催した。 ・学校への具体的な支援や意見についてすぐに校内で共有し、情報発信に努めた。 ・協議内容を教職員及び保護者、地域に学校だよりを活用して周知した。	B	アンケートにおける肯定的評価は 60% 超であった。協議を重ね、具体的な支援をいただきながら着実に前進し、連携を深めることができた。ただし、保護者には学校運営協議会で意見や活動が見えていない。次年度は保護者を含めた熟議の設定を検討したい。	B
②	・「家庭・地域の理解と協力を得た教育活動」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を 80%以上とする。	学校だよりや学年だよりなどを活用して生徒の功績を報告した。行事ごとにアンケート機能を活用して保護者からコメント入力してもらい、日頃から保護者との連携を強化し、良好な関係づくりに努めた。	B	アンケートにおける肯定的評価は 80% 超であった。特に、ホームページの学校日記を随時配信するなど情報提供に努めた。しかし、情報提供が一方通行であることは否めないで、互いに学校と家庭が協働しようとする姿を理解する必要がある。	B
③	・「地域との連携」についてのアンケートにおいて肯定的な回答を 80%以上とする。	・町民大運動会（全校生徒）、地域防災訓練（全校生徒）、笹幡フェスティバル（部活動）に参加した。	A	アンケートにおける肯定的評価は 90% 超であった。生徒の参加により地域の活性化に貢献できた。地域防災に対する意識の醸成にもつながっている。今後は持続可能な取組みにすることが必要である。	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	学校としてできることは実践している。議論された内容についての周知方法は検討する余地がある。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(5) 特色ある教育活動**【ア】 自己評価**

重点目標		①リーディング DX スクールとして、教育活動における ICT の活用を推進する。 ②デジタル・シティズンシップ教育の充実を図る。 ③日本の伝統的な文化「稲作体験」を実践する。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	・「リーディング DX スクール」に関するアンケートにおいて肯定的な回答を 90%以上とする。	・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実につながるクラウド活用をした。 ・生徒自らがクラウドを活用し、主体的に取り組む特別活動を実践した。 ・ホームページの更新を随時行った。	B	お互いの良い所を見付ける等の活動と組み合わせることで今まで気付かなかった友達の良さを発見したり、友達の考えの変容に自分が関与していたことが分かることで自己肯定感を高めたりする効果があった。アンケートにおける肯定的な回答について、保護者は70%超に対し、生徒は80%超であった。今後も全教員が一丸となって推進していく。	B
②	・「デジタル・シティズンシップ教育」「メディア活用」に関するアンケートにおいて、肯定的な回答を 90%以上とする。	・年度当初に「SNS 笹塚ルール」「タブレット活用ルール」を配布した。 ・いたずらや逸脱行為を放置せず即応することを基本とし、教科等でデジタル・シティズンシップの要素を与えることで、協働や共有を円滑に進めた。	B	アンケートの評価は70%超にとどまった。事実と根拠を常に確かめ、他者への配慮を忘れずに、自分の責任を考えることができるよう、対話や議論を通して様々な視点をもたせる教育活動を一層推進する。今後も、家庭と連携して取組んでいく必要がある。	B
③	・「家庭・地域の理解と協力」「学校の特色」に関するアンケートにおいて、80%以上とする。	・調布農園、地域、PTA、おやじの会と連携し年間を通して実践する。 ・1年生はもみ蒔き、田植え、2年生は稲刈り、3年生は餅つきを実践する。	B	アンケートにおいて、「家庭・地域の理解と協力」は80%超であったが、「学校の特色」については60%程度であった。学校の特色が何か、特に保護者に伝わっていないことから、より多くの機会で広報する必要がある。	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	評価指標 90%を 80%に見直す必要がある。HP 発信を中心とした情報発信を工夫する。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない